

## 組織における倫理的行動に関する研究 (3)

— 民間企業従業員の自由記述をもとに —

吉田道雄<sup>1</sup>

### A Study of Factors in Ethical Behavior in Organizations (3)

— Analysis of Free-description by Corporate Workers —

Michiko YOSHIDA

(Received October 1, 2015)

本稿は「組織における倫理的行動に関する研究 (吉田 2010, 2011)」の続編である。先行研究においては、企業組織体の従業員から「倫理的行動」および「非倫理的行動」についての考えを自由記述によって収集し、その分析を行った。本稿でもその方法を踏襲するが、具体的な項目の分析に入る前に、「倫理的行動」についての筆者の視点をまとめることにする。

#### 倫理的行動の起源についての考察

神ならぬ人間にとって「倫理」あるいは「モラル」は永遠の課題である。地球上に人類が生まれてこの方、われわれは「倫理」の問題に直面し続けてきた。そして、その事情は今後も変わらないだろう。人間は、第一義的には「生きる」ことを前提にして「生きて」いる。個体としての人間は消滅しても、次の世代をつくって「生き続け」ようとする。「人はパンのみのために生きるのではない」とは言ってみても、まずは「生きて」いなければ、何事も語れない。また「パン」も、目の前にぶら下がって食べられるのを待っているのではない。それを得るために、それ相応の努力が求められる。

そして、人間が生きていくために欠かせないものがある。それは「他人」たちである。さらにほとんどの生き物と同じように、人間も「ひとりで生きていく」ことができない。そこで、はじめは自然発生的に、そして後には意識的に組織が生まれていくことになる。

ここで人間が「1人しかいない」という非現実的な状況を考えてみよう。仮に彼あるいは彼女を「人間A」と呼ぶことにして、この「A」には「倫理的行動」、あるいはその反対の「非倫理的行動」というものが想定できるのだろうか。毎朝、「A」は太陽の日

差しに促されて目覚める。その程度は別にして空腹を感じるだろう。そこで、「A」は起きて食べ物を探しに出かけるだろう。もちろん、長い経験から食べ物を蓄える術を身につけていて、それを朝食として摂ることになるかもしれない。いずれの形をとるかはわからないが、食べ物を首尾良く手に入れば朝食は終わる。

それから「A」の頭には昼食のことが浮かぶに違いない。われわれ人間が食事を毎日3回摂るようになってからそれほど時間は経過していない。したがって、このとき「A」の頭に浮かぶのは夕食であるかもしれない。地球上で生きるあらゆる生き物たちと同様に、人間たちも食べるものは「欠乏」し続けていたはずである。そんな状況下では、「毎日規則正しく三食」などと考えている余裕などなかったに違いない。とにかく、思考の大半が「食べること」で占められていたことだろう。こうして「A」の生活は、「食する」ことを中心に時間が過ぎていく。何を食べても、生きることが大事なのである。現代人のように、好きなことをしたりスポーツを楽しんだりするゆとりはない。生きていくための食料を手に入れることがきわめて困難な時代だったのである。

もちろん食探しに疲れれば休憩するし、ときには夢の中で「満腹」を体験することがあったかもしれない。ともあれ、「A」は「1人」なのだから、仲間と語り合ったり、遊んだりすることはないのである。

この時代に「A」が環境に恵まれて「食べるもの」に不自由しなければ、その地にじっと住み着いたに違いない。そこでは「食生活」も充実しているから満足のうちにその一生を終えることになる。これに対して「食環境」が貧弱であれば、身の回りのものをあつと言う間に食べ尽くしてしまう。そうなれば、食を求めて移動しなければならなくなる。人類が農耕の知恵を

\* 熊本大学教育学部附属教育実践センター

獲得して、一定の土地に定着することができるまでには、かなり長い時間が必要だった。

ともあれ、この段階で「A」には「食べ尽くすこと」が環境を破壊する「非倫理的」な行動であるといった意識はないはずだ。そこでは、生きることに最大の価値が置かれているのであり、そのためにすべてのエネルギーを費やすのは当然のことだからである。それは、「善悪」といった価値意識を含む問題ではあり得ない。そもそも、それを「評価する人間」がいないのである。そして、時間の経過とともに経験を積んで、「A」が食べ物を手に入れる方法が洗練されていく。そうなれば、幸いにも「蓄え」ができることもあるだろう。あるいは、動物を捕らえる技術を身につければ狩猟も可能になる。これで貴重なタンパク源を確保するわけだ。このとき、「A」が「生き物の命を奪うなど、自分は何と非人道的、非倫理的な行いをしているのだろう」と思い悩むことはないだろう。それは生きるために欠かせない行為であり、「倫理的」な問題として意識される余地はない。もちろん、人間は生活を通した様々な局面で「痛み」を体験する。だから、動物の命を奪うとき、自分が知っている「恐怖」や「痛み」は想像できる。とりわけ相手が動物の場合は、息遣いも聞こえるから、植物などと比較して、それらが命をもって生きていることがはっきりわかる。そして、自分が手をかけるときは、恐怖に怯える姿や苦しむ様子を目の当たりにする。そうした状況の中で、「なにかしら申し訳ない」気持ちになったり、「やり過ぎない方がいい」といった感情や意識が生まれたりする可能性はある。

人間が動物を対等の「構成員」として生活集団を創ることはない。しかし、自分の体験をもとに、「死にたくないのだろう」とか「痛いだろう」といった「共感的感情」が生まれる可能性はある。自らが生きるために、「生きる物」と対峙し、その命を奪おうとする。その際に、相手の「反応（行動）」を目の当たりにして、「同情」や「思いやり」のようなものが生じる素地はある。

ここまで、「人間が1人だけで存在している」という非現実的な前提でものを考えてきた。いずれにしても、こうした状況では、「倫理」はとくに意識されることはなく、したがって問題にもなり得ない。

そこで次に、やはり非現実的な仮定ではあるが、「人間が『2人』いる」ケースを考えることにしよう。もちろん、この2人はお互いに関わりをもっていることが前提である。お互いの存在を意識できないほど離れていては、「2人いる」ことにならない。グループ・ダイナミクスでは、「相互に作用している2人以上の人の集まり」を「集団（グループ）」と定義してい

る。つまりは「2人」揃えば集団だと考えるわけで、これが「集団」として最小の単位ということになる。

ただし、筆者は「1人だけであっても集団の条件は満たしている」と主張してきた。それは、人間が生きていく限り、「社会」「集団」「組織」、そして「他者」を一瞬たりとも意識しないことはできないからである。たとえば個室である自分の書斎で本を読んでいる状況を考えてみよう。こうした1人で書籍に目を通しているときも、人は「社会と関わっている」のである。そもそも書籍は他の人間や集団によって書かれたものである。さらに、それは言語という、人間によって創られた、きわめて社会的で文化的な道具を仲介しているのである。たまたま個室にいて物理的には「1人」しかいないとしても、われわれは社会や集団から離れることはできないのである。ただし、社会や文化を取り上げるからには、それは地球上に「一定程度の人数」が住んでいることを前提にしている。

こうしたことも踏まえて、本稿では「2人」の人間が「集団」を構成したところから議論を続けよう。そして、この2人にとって「ともに生きていく」ことを前提条件とする。それは前提と言うよりも、必須と言った方が適切だろう。人間は「ともに生きていかなるを得ない」のである。こうして、二人は仕事を分担し、互いに助け合って生きていくことになる。これが「分業」の原初形態である。

さて、この「分業」という方法を採用した瞬間から2人の間には「違い」が生まれる。そもそも「分業」は、文字通り「仕事」が「まったく同じ」にはならないことを意味しているからである。ただし、「まったく同じ仕事」、たとえば2人とも「獲物を見つける」ことに専念するケースも考えられる。しかしながら、そうした場合であっても、二人の間には違いがある。たとえば、「獲物」を見つける「確率」、あるいは「運」は違ってくる可能性がある。さらに、「獲物」を見つけても、それを仕留める「力や技量」に差が出てくることも考えられる。それが完全に偶然や運によるものであれば、二人の成果は平均化されて長期的には同じ程度になる。ところが、1人はいつも獲物を捕まえるが、一方はほとんど収穫なしという現実が続いていくとどうなるか。それが「運」や「偶然」によるものだと考えにくくなる。そのうち二人はそれが「力」の違いによっていることを認めるようになるだろう。さらに、より大きな「力」をもっている方が、それは「自分が努力したから身についたのだ」と考える可能性もある。そうすると、「自分がもう1人を食わせてやっている」という思いに至る可能性が高まるのである。

そもそも人間の筋肉は生まれたときから「まったく同じ」ではあり得ない。したがって、「同じ努力」を

しても結果に差が出てくることは当然なのだ。そこで、比較して優位な方が、現実を「自分の方が恵まれているからなのだ」といった理解をすれば、二人の安定した生活は続いていく。しかし、優位な方が「自分が食わせているのだ」と思った瞬間に、すべてを平等に分けるのを不合理だと考えるだろう。そこで獲物の一部を隠すという誘惑に駆られるかもしれない。これは二人が力を合わせて差別なく生きていくという目標から見れば、「倫理違反」の兆しの現れである。しかし、それでも住処に帰ればお互いに食べものを分け合って生きていく。これが理想の共同生活だろう。ここで、二人の間に信頼関係ができていれば、助け合いの生活が続いていくに違いない。

ところで、自分の力で手にした獲物を「隠す」ことを「倫理違反の兆し」だとした。しかし、これを隠す側から見れば、それは「当然のことだ」と主張する可能性がある。さらに、それを「正義」だと言うかもしれない。ある意味では、こうした「平等」は「正義」と相性は悪くない。「いつも自分が獲物を獲っているのに、もう一方は何も成果を挙げられない。それにもかかわらず、自分の力で獲得したものをそのまま半分にするのは平等ではない」ということである。これは「働きに応じた」分配である。これに対して完璧に反論することはむずかしい。しかし、それならそれで「隠さない」で自分の意見を主張してはどうか。ともあれ、獲物の一部をこっそり隠すことは正義にかなっているのか、あるいは非倫理的行為だと非難すべきなのか。その結果としてもう一方が飢えて命を落とすようなことになれば、隠す行為は非難されるだろう。人間はひとりでは生きていくことができないことを前提にすれば、それは自分の首を絞める行為でもある。

そこで、獲物を「隠す」のではなく、相手に対して「おまえは獲物を捕ることができないのだから、生きていける最低限のものしかやらない」と宣言する場合はどうなるか。その際は、一方が獲物の大部分を独占することになる。現実には、両者の間に歴然とした力の差があるのだから当然だとする考え方はあり得る。しかし、こうした発想が倫理的に問題がないと言えるだろうか。これを容認するのであれば、十分に栄養を取って健康に生きていける者たちとギリギリの生活を送らざるを得なくなる層に分化することになる。その結果として弱い方は生きてはいけるが精神面では従属的な立場に置かれることになる。こうした関係が永続する場合、それは倫理的に問題にならないのか。

ここまで、地球上に二人の人間が相互に作用し合いながら生きていくという、きわめて非現実的な思考実験を進めてきた。そこで明らかになったのは、個々の人間が完璧に同じでない限りかならず両者には力の差

が生じる。それにも拘わらず、ともに「同じ」ように対応することが約束され、それが守られる限りでは問題は生まれない。そして、多くの社会では「強きが弱きを助ける」ことは「善」だとされる。したがって、そこに倫理的な問題は生じない。

そこで人間の「理性」の役割が重要になる。こちらが先に食べないと自分の命も保証されない。そうした状況であれば「取った者勝ち」もやむを得ない。しかし、ある程度食べられる量を確保したのであれば、自分だけで「貯め込む」のではなく、相手に少しは分配する気持ちの余裕を持つ。これが「理性」の作用だと考えたい。あるいは、獲物を捕る力がないからといって一方がいなくなると困るのであれば、独り占めして喜んでばかりはおれないのである。

ここまで、地球上に2人だけしかいないという仮定下で生起することについて思考実験を進めてきた。獲物を獲得する実力に差が出ると、より多くを獲得できる方から見れば、「平等に分けること」が受け入れがたくなる。その結果、「強い方」が「弱い方」を支配する現象が生まれる可能性が高まる。こうして結果としては「支配-被支配」あるいは「支配-服従」関係が出来上がり、定着する。これが2人の世界にとどまらず、人間社会全体の「常識」になったというのが歴史的な事実なのだろう。しかし、それをそのまま承認するならば、人と人の間に「差」があることは「当然」であり、「支配-被支配」も必然的なものとなる。そして、そこには「倫理的な」問題はないとの結論さえ導き出される可能性がある。ある意味では、こうした力の関係が生き物の進化を促進してきたのだろう。しかし、それは「弱肉強食」の論理に他ならない。あくまで「人間」としては、これをそのまま受け入れることは歴史の流れを逆流させることになる。

もちろん、動物の場合には力の差があること自身に何の問題もない。それが「自然の掟」なのである。ただし、それで種が絶滅するようでは「遺伝子を伝える」という生命体にとってもっとも重要な目的が達成できなくなる。このことを動物が意識しているわけではないが、われわれは攻撃が行きすぎないレベルで止まることを知っている。それでも、その行為を「倫理的」とは言わない。

これが人間になるとどうなるか。ホロコーストによる大量虐殺は言うまでもなく、人が人の命を奪うことは「倫理的に」許されない。これは人類共通の基本的な行動規範になっているのである。

しかし戦争が起きると個々人の意思とは関わりなく人の命を奪うことになる。これは「殺人」ではなく、戦争の目的に「添った」ものとして、「非倫理的行為」とは見なされない。ところが、戦争のようなストレス

状況においては、国際法から見ても許されない「非倫理的」「非人道的」行為が起きるのである。いずれにしても、多くの人間が互いに関わりあいながら生きていく社会においては、その基礎に「倫理」問題が横たわっているのである。本稿での分析はここまでとし、今後も倫理の根源的な分析を続けていくことにしよう。

### 倫理に関する自由記述の分析

ここからは、現代組織における「倫理的な行動」の分析に移ることにする。

すでに述べたように、吉田(2010, 2011)は、複数の組織で働く人々に「倫理」に関して質問調査を実施し(方法の項参照)、その結果について報告しており、これはその第3報として位置づけられる。

### 方法

**調査対象者** 調査は、質問内容の性質から完全な匿名を条件にして行われた。このため、調査の対象と時期は明記しないが、回答者は4つの企業組織に所属しており、その中には管理者も含まれている。対象者の総数は約2,000名である。

**質問項目** 回答は自由記述式で以下の質問をした。

いま、「企業倫理」の確立が求められています。あなたにとって「倫理的に行動する」とは、どんなことでしょうか。また、どんな行動が「非倫理的」だと思いますか。具体的にお書き下さい。

### 結果

上記の質問に関して具体的な回答をしたのは775名であった。ここでは、「倫理的行動」として挙げられたものについて分析する。

#### 1) お互いを思いやり、自分本位にならない

これほど「自明」のことはない。ことばだけであれば、子どもでも知っている。ただし、これは言ってみれば「建前」的なところがある。そもそも「知っていること」と「実践していること」は必ずしも一致しない。われわれは「知行不合一」と言うが、これは「知行不合一」の現実を乗り越えようとする目標の感がある。筆者が専門にしているグループ・ダイナミックスの領域でも、「知(識)」と「行(動)」間にあるギャップを埋めていくことが重要なテーマの一つとして研究が行われてきた。

すべての人々が、人種や文化の違いを超えて「知識」を「行動」に移すことができれば、国家レベルで

の戦争さえなくすることができるだろう。しかしながら、長い歴史を振り返って見れば、我々は「知行」の「合一」を達成することがいかに困難であるかを知っている。そして、「自分本位=自己中心的」な気持ちが支配し、他者にとってマイナスであることがわかっている。あえて問題行動を起こすという事態が生まれる。そうした「個人的」な「自己本位」の行動が重大な結果をもたらした事例は枚挙にいとまがない。いずれにしても、「相手の気持ちになれるかどうか」は、道徳の問題だといえるだろう。

#### 2) 失敗や違反をしたときには正直に反省して、怒られる

末尾の「怒られる」が、笑いを誘うような表現である。いまでは前世紀の思い出になるが、「反省するだけなら猿でもできる」といったテレビCMのコピーが話題になったことがある。しかし、人間の行動を改善するためには、真の意味での「反省」は欠かせない。それが同じ失敗を繰り返さないための必須条件なのである。ただし、その反省が実際に活かされるかどうかは、その後の経過を見なければわからない。したがって「反省」が「行動変容」の「十分条件」でないことは明らかである。「わかってはいるけれどそれができない」「ついしてはいけないことに手を出してしまう…」人間はこのことばを繰り返してきた。行動を変えるためには、口で言うだけではなく、個々人あるいはそれが集まった集団や社会の自覚と強い意志が必要なのである。

また個人の場合は、周りの状況や環境も重要な影響を与える。たとえば「新入社員が同じような誤りを繰り返す」といった事象が起きるのであれば、その原因は個人ではなく環境側にあると考えるべきである。そうした際に、「今どきの若い者は」と嘆くようでは問題を把握していないと批判されても仕方がない。それよりも、問題事態を引き起こす要因の発見とその改善に時間を費やす方がはるかに効果を期待することができる。

ここでは、最後に「怒られる」まで付け加えられているところが興味深い。これを書いた回答者は、「怒られることを覚悟して正直に事実を伝える」ことを「覚悟」しているからである。自分が問題のある行為をしたとき、「正直に申告する」ことは、さらに大きな問題の発生を予防するために欠かせない。したがって、「失敗」について報告を受けた上司(リーダー)の「怒り方」がきわめて重要になる。職場の仕事仲間がいる前で大声を発して、個人の非難に終始する。こうした対応では、「正直に申告する」気持ちが失せるのは当然である。しかも、その「マイナス効果」は

「怒られている」本人に止まらない。その状況を見ている周りの人々にも「正直者は怒られる」というマイナスの心象を創り上げてしまう。

ところで、これに類似した回答に「正直な仕事の実施」というものがあった。きわめて単純明快で、「そのとおり」としか表現のしようのない。厳密には、「正直」とは何かと言った議論も必要だろうが、やはり「正直こそ基本」という当然のことが職場全体の常識になることが期待されるのである。

### 3) そのため3日徹夜しても仕方ないもの

これも自由記述ならではの回答である。やはり一種のユーモアさえ感じられる。ともあれ、これは、「問題があったら徹底してその解決に努力する」ことの重要性を訴えているのである。何か起きたとき、「このまま処理すれば問題はあつた。しかし、それを完全に解消するには時間がかかる。まあ、そこまでする必要はないだろう」といった対応に陥ってしまう危険性が少なくない。これはその危うさを指摘している。とくに、「問題がある」ことが明確であっても、現実それが起きたり、表面化する確率が「きわめて低い」と思われる場合に、こうした「問題解決回避行動」が起きやすくなる。さらに、日常的に「多忙」な仕事で疲弊しているようなときは、「問題」に気づいても、その解決策を考える力が失われている危険性も否定できない。

もちろん、「だから仕方がない」ではすまされない。現実には事故やトラブルが起きれば、その対応のために、それ以上の負担がかかってくる。文字通り「3日徹夜」する必要性の適否は別にして、「この問題をクリアするまでは先に進まない」といった職場の雰囲気は欠かせない。

### 4) 客観的、冷静に物事を見て多くの人が正しいだろうと思われることをする

きわめてわかりやすい基準である。もちろん、世の中は「多数決」だけで判断すると問題が起きることもある。とりわけ価値観や信念などが議論される場合、「正しいこと」について意見の一致が得られるとは限らない。したがって、「多くの人が正しいと思っていること」が「正しいかどうか」も絶えず点検しておくことが求められる。歴史を振り返れば、「多数者」の発想が誤っていた事例も少なくない。たとえば、ある時代まではほとんどすべての人間が地球は平たく太陽が天空を回っていると信じていた。そうしたなかで、「地球が丸い」とか「自分たちの方が太陽の周りを回っている」などと発言すれば、とんでもない人間だと無視されたり、迫害すら受けたりしたのである。

そこで、基本的には組織全体で「正しい」とされていることにしたがって行動する。その上で、「正しい」とされていることが本当に「正しい」状態を保持しているのかどうかを議論し続けていくことが求められているのである。法律を含めて、世の中にあるほとんどすべての決まり事は、それができたときには必要とされる理由があつたはずだ。しかし、時間や環境の変化に伴って、存在意義が失われたり、むしろ仕事の遂行を阻害するようになってきたりするものも出てくるのである。

職場で規則やルールが問題になったとき、「とくに差し障りがないのだからいまのままでいこう」といった会話が交わされることがある。しかし、それは「本当に差し障りがない」のだろうか。そこを改善すればさらに仕事が捗るかもしれない。それにも拘わらず「何もしない」で放置しておくのでは、点検の義務を怠っていることになる。

### 5) スケジュールや状況に惑わされずルールを守る

ここには「忙しくて」という意味合いが含まれている。当然と言えば当然なのだが、「時間がないときは多少のルール違反も仕方がない」ということになりがちなのである。そもそも仕事は予め決められた「スケジュール」に添って進められることになっている。それが対外的な「約束」を伴ったものであれば、そのプレッシャーはさらに大きくなる。こちらが提示した「納期」に間に合わなければ組織としての信頼を失ってしまう。しかも仕事の受注に際しては厳しい競争にさらされる。こうしたなかで、現実的で余裕のある「スケジュール」を設定することは至難の業となる。しかし、そこでルールを逸脱しては意味がない。その状況を「智恵を出すチャンス」と受け止め、絶え間なくチャレンジしていくエネルギーを維持し続けることが期待されているのである。

「スケジュール」は時間に関わっているが、これに「状況」という、より幅広い条件が加わると困難さはさらに増大する。この先「何が起きるかかわからない」ことまで「状況」と言えば「状況」なのである。とりわけ「緊急事態」では、「ルールなど守っている場合ではない」といった勢いが優先しがちになる。そのなかには「想定外」の事態もあるだろう。こうして「あれやこれや」と挙げていくと、「一体全体どうしたらいいのか」と途方に暮れてしまう。

われわれは、あらゆる「状況」に適切に対応することはできない。いわゆる「想定外」のことも起きる。そうしたなかで「ルールを最優先する」ことをどう実現していくか、普段から職場で情報交換しながら、考え方の共有化を図っておくことだけは確実に維持し続

けていきたい。

調査では「非倫理的行動」についても記述を求めている。ここでは、そのうち1ケースを取り上げる。

#### 6) 失敗や違反をその場しのぎで対応する

これが「非倫理的行動」に該当することは論を待たない。この意見には「隠す、嘘をつく、ごまかすこと」という具体的な行動が付加されていた。これらは「非倫理的行動」の「3点セット」と言うべきものである。こうした「動機付け」の結果、まさに「その場」を「しのぐ」ことはできても、いずれ問題は大きくなって現れる。そこにまで至れば、組織として取り返しのつかない状況に陥っている可能性が高まる。さらに存続そのものが危うくなることも少なくない。それにも拘わらず、いやそうだからこそ、さらに「隠す、嘘をつく、ごまかす」圧力が強まることになる。

そして、これ以上「隠せず、嘘もつけず、ごまかすこともできない」ところまで追い込まれてしまうのは皮肉と言うべきだろうか。その時点で「正直」に事実を伝えても、すでに「遅すぎる」のである。

こうしたケースに出会うと、当初は関係者たちの性格や資質、さらには能力が問題にされがちになる。人間の行動は「個体」と「環境」が相互に影響し合って生まれるものだから、「個人的」な問題を分析することは必要だ。しかし、こうした問題の背景には組織の体質など、個人的な要因を超えた、「環境要因」にも目を注いでいくことが欠かせない。それによって、

「同じ過ち」を犯さない手立てを考えていくことができるのである。

こうした視点に立てば、「どうして隠す、嘘をつく、ごまかす状況が生まれるか」について分析を進めていくが必要になる。

本稿では、まず「倫理的行動」の起源について思考実験的な考察を行った。そうした「起源」に遡る発想から言えば、「隠す、嘘をつく、ごまかす」要因の基本には、「自分を守りたい」という動機付けがあると思われる。これは人間に限られたことではない。地球上で生を受けたあらゆる生き物が、その生を全うするためには自分を徹底して「守る」ことが必要なのだ。ただし人間の場合は、それが社会という組織にとって問題を引き起こす潜在可能性を持っているのである。しかし、それで「一時的」な「守り」はできても、長い目で見れば、さらに自分を「危うくする」ことになることは明らかである。それでもあくまで自分を守ろうとする。こうして、小さな問題が、組織のほかの構成員を巻き込みながら、大きな問題へと拡大していくことになる。

#### 引用文献

- 吉田道雄 (2010) 組織における倫理的行動に関する研究 : 民間企業従業員の自由記述をもとに。熊本大学教育学部紀要 (人文科学), 59, 251-256.
- 吉田道雄 (2011) 組織における倫理的行動に関する研究 (2) : 民間企業従業員の自由記述をもとに。熊本大学教育学部紀要 (人文科学), 60, 215-220.